全国シルクのまち情報誌

知8・る・く

平成２６年３月

No.5

シルクのまちづくり市区町村協議会

情報誌の名称の『知・る・く』は、「シルク」の事を「知る」、「シルク」の街を「歩く」という意味が込められており、３つのフレーズを融合させた造語です。

「知」の「口」部分は絹糸をイメージ。同時にシルクの無限大（∞）の可能性も表現しています。「く」の下部には靴をあしらい、街を歩くイメージと協議会の前進の意味を込めました（足利市商工振興課の杉戸さんによる発案・命名です）。

No.5＞＞＞Contents

●協議会顧問のご紹介/【特集】顧問に聞く！（第 4 弾）

（１）顧問の紹介 …… 1

（２）質問の回答 …… 2

●“新加入”協賛団体のご紹介

（１）協賛団体の紹介 …… 8

●わがまちシルク PR 隊のご紹介

（１）鶴岡シルクガールズの紹介（山形県鶴岡市）…… 15

（２）丹後小町踊り子隊の紹介（京都府京丹後市）…… 18

●会員自治体の情報（シルクに関わるイベントや取り組みなど）

（１）茨城県結城市 …… 21

（２）栃木県小山市 …… 22

（３）長野県岡谷市 …… 24

（４）滋賀県長浜市 …… 26

（５）京都府与謝野町 …… 28

（６）鹿児島県鹿児島市…… 29

（７）鹿児島県奄美市 …… 30

《参考資料》

シルクのまちづくり市区町村協議会・構成員一覧 …… 31

シルクのまちづくり市区町村協議会の設立趣意書 …… 32

協議会顧問のご紹介

顧問に聞く！

シルクの新たな利用に関する研究者が顧問に仲間入り！

協議会では、活動をさらに推進するため、自治体会員および協賛団体、加えてシルクに関する様々な分野の学識経験者の方を顧問として就任を要請する等、組織の拡大に努めています。

昆虫学の分野から見たシルクに関する研究開発分野でご活躍されている東京農業大学農学部の長島孝行教授に、一昨年の３月より顧問にご就任いただきましたのでご紹介いたします。

長島孝行（ながしまたかゆき）氏

東京農業大学農学研究科博士課程修了。農学博士。東京農業大学農学部教授。ニューシルクロードプロジェクト代表。日本野蚕学会評議委員、千年持続学会理事、オーガニックコスメ協会理事、日本マイクロナノバブル学会理事、富岡シルクブランド協議会顧問、日本学術フォーラム委員（科学技術庁 2000）、千年持続社会に向けた科学技術のあり方に関する調査委員（文部科学省 2001）日経サイエンス未来を創る科学者達に採択 2003 年度、2010 年度

著書：蚊が脳梗塞を治す！昆虫能力の驚異（講談社 α 新書）、千年持続社会―共生・循環型文明社会の創造（日本地域研究所、共著）、昆虫テクロノジー研究とその産業利用（シーエムシー出版、共著）

インタビュー本：茂木健一郎　脳は天才だ！（日経サイエンス編、日経ビジネス人文庫）、テクノロマンインタビュー明日の技術を夢見る研究者に聞く（商工中金経済研究所）、自然にまなぶ！ネイチャーテクロノジー（Gakken）、心をそだてる科学のおはなし人物伝 101（講談社）、地球大学講義録 3.11 以降のソーシャルデザイン（竹村真一、丸の内地球環境倶楽部、日本経済新聞出版社）他多数。

また、「愛・地球博」中部千年共生村、生物力監修、洞爺湖サミット科学技術プレゼンテーション（外務省）、Silk Diversity（国連大学）、COP10（名古屋）　他多数のイベントを主催。

―先生の研究開発のコンセプトとなっている「インセクトテクノロジー」について、詳しく教えてください。

長島　昆虫類は種類数も個体数も自然界で圧倒的に多く、その量は人類の 15 倍とも云われている生物群です。

「インセクトテクロノジー」は、1995 年頃に使い始めた私の造語で、簡単に言えば虫達（インセクト）の機能性やナノレベルの構造、個体の習性などを研究して社会に活かすというものです。言い換えれば、生物や自然などの再生可能資源と経済を両立させようというテクロノジーの一つと考えて結構です。

バイオミメティクスのように、生物の構造を単に石油等の枯渇する地下資源を用いて模倣するのではなく、生き物や自然等を上手く使い、かつ、それらを守りつつリサイクルまでを実践する「持続性」を重視した日本発の科学技術だと言えるでしょう。

― 「インセクトテクノロジー」を代表する「シルク」という素材について、どのように捉えられていますか？

長島 「シルクは人工的に作れる」と信じられた時代もありましたが、無理です。似て非なるものなら可能です。科学は万能ではありません。出来ることと出来ないことがあるのです。

「生き物にとって繭（シルク）とは何か？」を求め、15年以上研究した結果、二つの大きな発見がありました。

一つは、シルクを作る昆虫は蚕だけでなく、10万種以上の生き物が存在していることです。コウチュウの仲間、ハエの仲間、バッタの仲間など実に多種多様です。また、クモ、ダニは勿論、貝の仲間もシルクを作ります。川に住むトビケラという虫は石と石を接着させるボンドの様なシルクを作ります。チョウの仲間でもソフトボール大の繭を作るし、金・銀・銅色に輝く実に綺麗な繭を作る蛾もいます。言い換えれば、私達が住むこの地球上には10万種類以上のシルクが存在するということです。全てナノ構造や機能性等が異なります。カイコの作るシルクは10万種類の一つにしかすぎないということです。

二つめは、シルクの持つ驚くべき機能性です。カイコシルクの 93%以上はタンパク質で、その約 70%がフィブロインという単純タンパク質です。私は先ずこのフィブロインタンパク質に注目して色々な実験を重ねて来ました。その 10 年以上にも及ぶ実験結果が、右図の結果です。

図　シルクタンパク質の機能特性（長島原図）

この機能特性を良質に利用すれば、その先には様々なものづくりが見えてきます。既に私達は、美容液（生体親和性＋静菌性＋UVカット＋加工特性を利用）や健康食品（生体親和性＋吸脂性＋難消化性＋加工）など様々な商品開発をしています。しかもタンパク質として利用しますので、原料となる絹は切った繭や屑となった繭で十分です。得られた原料のフィブロインパフは、サッと水に完全に溶け、無味無臭で様々な機能性を保持しています。現在このパフは私の所以外では作れないノウハウがありますが、3年後には全世界に公開する予定です。

面白いのは、ヤママユガ科のシルクです。カイコシルクが紫外線B波、C波を強くカットするのに対し、テンサン、タサールサンなどのシルクはA波、B波、C波と全ての紫外線を強くカットする特性があることを見つけました。また、この便利な機能特性の主な要因が、ヤママユガの仲間の糸の中にあるナノ構造にあることも解かりました。後に私はこの構造をシルクナノチューブと命名しました。ですので、ヤママユガ科のシルクはこの構造が宝の訳です。このナノレベルの構造などを良質に用いて商品化したのが、エリナチュレ（キッズデザイン賞受賞、5ページの図・左）や日傘で、機能性天然繊維に対して「天然機能性繊維」として注目されています。

10万種の虫達が古生代から作り続けているシルクは、紫外線、菌、捕食者等から身を守る虫達にとっての究極の「シェルター」でもあることが解かったのです。改めて生き物のものづくりには驚かされるばかりです。

― シルクの新たな利用の可能性について、どのような考えをお持ちですか？また、シルクは今後、どのように活用するのが良いと思われますか？展望についてもお聞かせください。

長島　これまでシルクはカイコが作るもの、そしてシルクは糸製品へ、の単純なビジネスだけでした。しかし、上に述べたように、繊維だけではなく、金色、銀色などの鮮やかな光沢をもつ繭はそのまま装飾品へ、また短繊維へ、更にはタンパク質として限りない活用法があります。アミノ酸にまで分解し食用に利用することも過去に行った時代もありましたが、それはもはやシルクではなく、また人工でも作れます。人工で出来ないものの利用にこれから大きな注目が集まるのです。

更にシルク製品は、生分解性プラスチック（シルチック？）にもなります。糸に戻すことも可能ですが、そのためには大量の石油などのエネルギーを必要とし、良質な利用とはいえません。出来るだけソフトランディングし易いリサイクルとしてもシルクプラスティックは有望だと思います。

また、カイコ以外にも無数の絹糸昆虫が存在しています。生物多様性条約を上手に使い、また世界のシルクを有効かつ良質に使う事が出来れば、シルクには「再び明るい未来」が待っているのです。

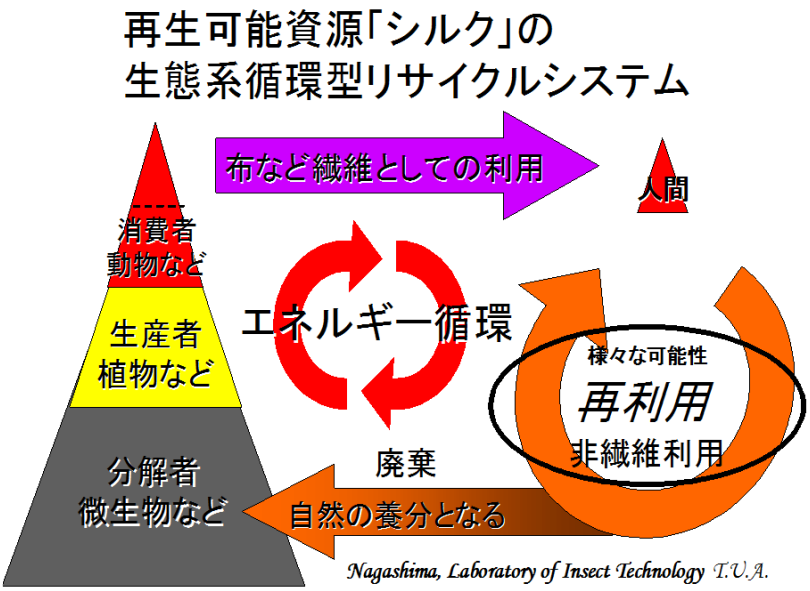


図　再生可能資源「シルク」の生態系循環型リサイクルシステム（長島原図）

― これまでのシルクに関する研究開発の内容や成果について教えていただけますか？

長島　ウールには羊、アルパカ、カシミヤ等様々なものが利用されているのと同様に、シルクにも色々な種類があることが分かってもらえたと思います。今後はそれらをきちんと差別化することが重要で、その為には各シルクが持つナノ構造、組成などから発揮される機能特性を十分理解し、正しい利用の仕方をする必要があると思います。下の写真は、エリシルクの持つ柔らかさ、紫外線遮蔽性、軽さ、臭い吸着性等を良質に利用した「エリナチュレ」で、日本の企業と農大の共同研究から産まれたものです。これが赤ちゃんや老人に普段着として普通に使用される日もそう遠くはなさそうです。

　また、フィブロインタンパク質の機能性を良質に活かした防腐剤無しのシルクと水だけの「エシカル」美容液（写真）を始め多くの美容系商品が研究室発として市販されています。また、シルクサプリメントは、中性脂肪だけでなく、血糖値、HbA1c、コレステロール値などの低下など、アミノ酸混合物には得られない優れた結果が千人を超える臨床実験で得られ、既に医学誌にも記載されています。

図　シルク研究から産まれた製品例
（左：キッズデザイン賞に輝くエリナチュレ繊維、中央：シルクと水だけのエシカル美容液、右：メタボ対策用シルクゼリー）（長島原図）

― シルクの繊維や織物としての利用については、どのようにお考えですか？また、シルク繊維や織物需要の増加を図る上で、研究者の立場からご意見やアドバイスがあればお聞かせください。

長島　シルクの利用は繊維や織物が王道です。これを忘れてはなりません。前述の非繊維利用は、糸に参加しなかった屑糸や屑繭を使えば良いのです。

では、繊維や織物需要を伸ばすにはどうすればよいか？それは皆さんで考えることです。研究者の立場から言えば、先ずは色々なシルクがあることを認識し、その特性をきちんと把握することが出来れば、今後のものづくりへの先は開けると思います。勿論、ライフスタイルを変えていくことも重要です。

ツルツル、スベスベするカイコシルクには、黄変、洗濯機使用が出来ない、シワになり易い、重いなど短所も沢山あります。他のシルクにも勿論長所短所があります。これを理解すれば、これまでにない様々な繊維や製品が出来る筈です。

同時にこれらの資源を確保することが重要で、必要になったがない、では困ると思います。ブラジルの養蚕は間もなく終わり、世界のシルクの90％を扱っているシルク文化のない中国も今後シルクを扱うか不透明な部分もあります。

―今後の協議会活動の方向性や具体的な取り組み等について、ご意見・ご提案があればお聞かせください。

長島　以上のような背景から、21 世紀に入って私はニューシルクロードプロジェクトを立ち上げました。日本はシルクやカイコ、クワの研究や技術では世界一です。にも関わらず養蚕は既に時代遅れとし、国として手厚い補助を突然止めてしまいました。しかし、良く考えてみてください。日本の「衣の自給率」は1％以下です。日本には毛も綿も作れません。シルクロードの東端の日本から新しい新養蚕ビジネスを展開しようと考えたのです。これがニューシルクロードプロジェクトです。また、過去の日本の素晴らしい研究データを無駄にする必要はありません。

このプロジェクトでは、桑葉、桑の実、カイコシルク、その他のシルクなどを幅広く、かつ全く新しい利用、リサイクル技術までをビジネスモデルに考えています。このニューシルクロードプロジェクトに参加されるのも良いかもしれません。

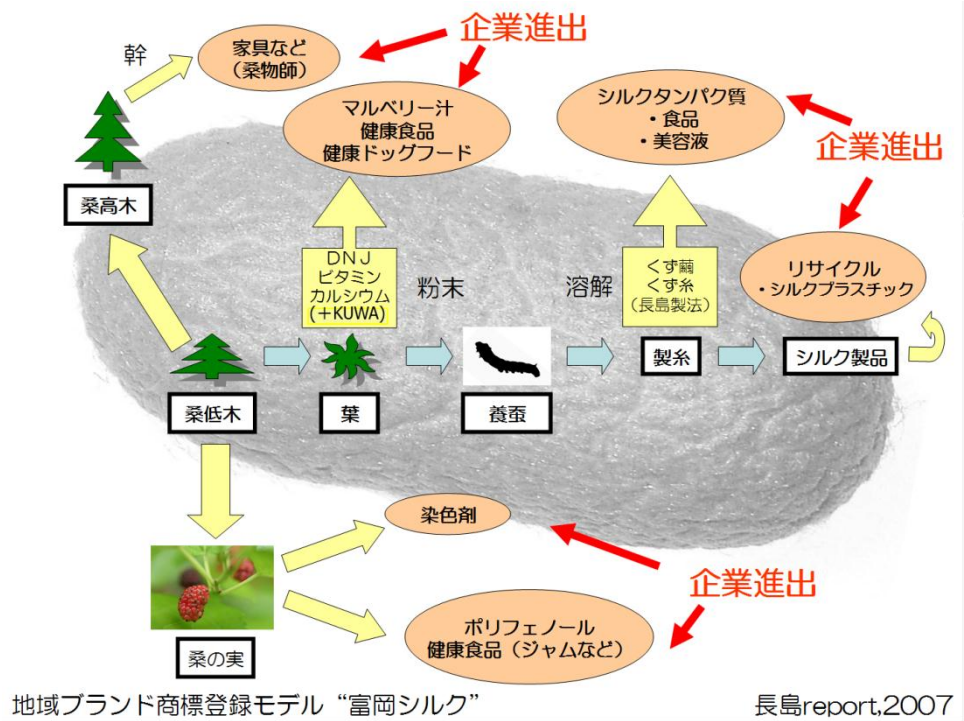


図　ニューシルクロードプロジェクト、桑からシルクの新しいビジネスモデル（長島原図）

”新加入”協賛団体のご紹介

シルクのまちづくり市区町村協議会では、幅広いご意見をいただきながら、事業を進めるため、シルクに関する様々な団体に協賛団体として加入いただいています。

平成 25 年７月に新しく新たに加入いただいた蚕糸・絹業提携グループ全国連絡協議会のご紹介をいたします。

『蚕糸・絹業提携グループ全国連絡協議会』

１　概要紹介

平成２４年４月にこの蚕糸・絹業連絡協議会全国連絡協議会（以下連絡協議会）が設立され２年近くがたちます。この間、連絡協議会が主催する展示会をはじめ、多くの純国産絹のＰＲの場面で以下の文章を掲載し紹介をしています。

「国産の繭・生糸は、国内の生産量が極めて少なくなり、このままでは消滅が危惧される段階に至っています。そこで蚕糸・絹業の維持・発展を図るため、絹製品の生産・販売に携わる関係者は現在繭づくりから製品の流通関係者までが一体となってグループを形成し、活動しています。国産の繭・生糸を使った魅力ある純国産絹製品をつくり、消費者から高い評価を得て購入していただき、繭・生糸、絹織物等の生産関係者、問屋・小売店等の流通関係者がそれぞれ再生産可能な収入が得られるようなシステムを構築することが本グループの活動のねらいです。」

２　設立経緯

蚕糸・絹業提携支援センター（財団法人　大日本蚕糸会）は、平成２０年２月から国産繭、生糸の希少性を生かした高品質な純国産絹製品づくりを通じて、蚕糸・絹業の再生と持続的発展を図ることを目的に、蚕糸・絹業の各業態を含めたグループづくり進めることを目的とした蚕糸・絹業提携支援緊急対策事業を始められました。その結果、全国で５８グループ（平成２６年２月現在５６グループ）が誕生しました。当初のグループが誕生した時から４年が経過した時点で中国等からの輸入圧力に加え経済危機が重なり販売環境が悪化し厳しい状態に立ち入っていました。このような状況を打破するために提携グループの責任企業がグループ間の横の連絡を密にし、純国産絹製品を一般消費者へアピールするための PR 活動の充実、又、そのための展示会の開催等を目的として、連絡協議会が立ち上げられました。

平成２４年４月１０日に有楽町・蚕糸会館において設立準備会に引き継ぎ、連絡協議会の総会、幹事会が行われ連絡協議会の設立が承認されました。以後、財団法人大日本蚕糸会と連携して、下記の主な項目に基づき活動を開始しました。

３　連絡協議会の主な活動項目

純国産絹製品のＰＲ・販売強化

（１）　純国産絹製品ＰＲ・販売促進強化戦略の作成

①　ＰＲ専門家が加わった戦略会議の開催、計画立案

②　蚕糸・絹業産地等の紹介

（２）　純国産絹製品のＰＲ・販売促進

①　戦略策定のための実践的なプリテスト、又は、ケーススタディーの実施

・ＰＲ／販売促進に直結する戦略的展示会の開催

連絡協議会が主催する全国規模の展示会の開催、各提携グループ毎に行う展示会の開催

②　販売促進に直結する宣伝手法の開発

・提携グループパンフレット、ブランドブックの制作

・各提携グループとリンクした魅力あるホームページの作成とフォローアップ

４　これまでの連絡協議会活動状況

（１）戦略会議・ワーキンググループ会議

雑誌社、ホームページ専門家、展示会企画等各界の専門家による戦略会議を開催、具体的な計画、実施事項を決定してきました。平成２４年度に５回、平成２５年度には７回開催。検討・決定事項は連絡協議会の方向性と展示会の展開内容、ホームページ他 PR 戦略の決定をしてきました。純国産絹のブランディング対策の検討もしております。

「蚕業技術研究所でのワーキンググループ会議」

ワーキンググループ全体会議

会議後の研修

（２）連絡協議会主催の全国規模の純国産展示会

ワーキンググループ会議により純国産絹に対するネーミングの必要性が出され検討の結果、「宝絹」に決定。以後展示会においては、「宝絹展」を使用しています。

平成２５年１月に銀座三越で第一回純国産絹「宝絹展」を開催し、本年１月までに４店舗で展開。

① 展開内容

・映像上映　奇跡の糸ができるまで

・生きた蚕（１齢、３齢、５齢）と世界に誇る繭の展示

・ワークショップ実演　　座繰り、結城地機、紅花染め、真綿つくり他

・ワークショップ（顧客参加）　繭クラフト、シルクブレスレット、ハンカチ染め

・提携グループの製品展示

② 展開店舗状況（各会場の特化場面の紹介）

・銀座三越　平成２５年１月１４日１５日　会場　９階銀座テラス

インタラクティブ映像展開（双方向での映像展開、年代問わず好評であった）

「会場風景」奥のスクリーンがインタラクティブ

「全体風景」左下光る絹のドレス

・札幌三越　平成２５年８月２０日～２５日　１０階催事会場
北海道大学、一般財団法人北海道開拓の村の協力を得ました。

「北海道開拓の村による講演」
“北海道の養蚕の歴史”
講師　細川健裕学芸員

「紅花染め実演」
新田克比古さん

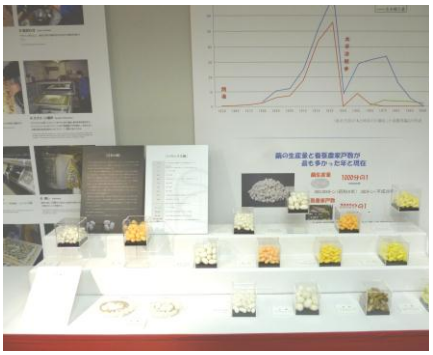
・新宿伊勢丹　平成２６年１月２日～７日　７階　呉服売り場
純国産絹の「今」「未来」コーナー設置

「世界に誇る繭の展示」
伊勢丹らしいステージの上に陳列

「未来コーナー」
８人の若手デザイナーによる作品

・横浜髙島屋　平成２６年１月８日～１２日　８階　催会場
シルクの街横浜の過去・現在・未来

「世界に誇る繭と横浜のシルク」PR パネル



「会場風景」真綿つくり実演他

③ 展示会媒体

Ｂ２ポスター、Ｂ５見開きリーフレット、DMはがき、新聞広告,新聞折り込みチラシ、電飾などそれぞれの店舗にあった媒体を利用し集客に努めました。

④ 開催状況

各店舗とも顧客の来場が多く、会場はにぎわっていました。特にどの会場でも生きた蚕と世界に誇る繭の陳列、研究者による説明は年代を問わず人気がありました。

最近では、価格の問い合わせも多く今後の販売に希望が持てるようです。又、ワークショップ、実演も好評で特に横浜髙島屋は予約でいっぱいでした。

（３） 提携グループ毎の展示会開催

平成２４年度は２３グループ、平成２５年度は３０グループの提携グループが、個々の展示会、新商品開発を行いました。連絡協議会としてはカタログ制作他多岐にわたり協力しました。末尾に提携グループ一覧表を添付します。

（４） ホームページ、ブランドブック、PR 冊子の製作

・ホームページ

平成２４年の９月に立ち上げ銀座三越純国産「宝絹展」の告知を掲載しました。その後は、各展示会の掲載、提携グループの紹介を常時更新しています。今回の展示会の結果も詳細に報告されています。ホームページご覧いただければ幸せです。ホームページは「宝絹」あるいは「蚕糸・絹業提携グループ全国連絡協議会」で検索できます。

・ブランドブック、PR 冊子の製作

ブランドブックは、現在進行中です。今後各提携グループの希望者を取材し、グループ全体のイメージアップ、純国産絹のブランド化を図ります。

蚕糸・絹業提携グループ一覧表

提携グループ名	代表企業等名
グループ１６７	有限会社織道楽塩野屋
白繭細１号プロジェクト開発チーム	株式会社マルシバ
“絹を未来に”プラチナボーイ研究会	株式会社マルシバ
日本蚕糸絹業開発協同組合国産シルク研究会	日本蚕糸絹業開発協同組合
富岡シルクブランド協議会	富岡シルクブランド協議会
日本の繭ときもの文化を考える会	田中種株式会社
日本蚕糸絹業開発協同組合国産シルク研究会普通蚕種部会	日本蚕糸絹業開発協同組合
西陣純国産絹振興会	西陣織工業組合
平田グループ研究会	株式会社平田組紐
新潟県産繭・絹振興会	合資会社山岸織物
綾の小石丸の会	株式会社あきやま
玉小石牛首紬研究会	大門屋
東京シルクの会	有限会社内海呉服店
ふじやまシルクプロジェクト	株式会社ＪＳ
信州繭ブランド織物振興会	有限会社シンセイ
千總純国産絹製品販売・商品開発グループ	株式会社千總友仙工場
碓氷製糸シルク工房の会	碓氷製糸農業協同組合
伊予生糸を守る会	西予市蚕糸業振興協議会
絹の会ぐんま200プロジェクト	絹の会
伊達天蚕推進研究会	りょうぜん天蚕の会
絹で奏でる音世界グループ	株式会社鳥羽屋
邦楽器糸用特殊生糸を守る会	丸三ハシモト株式会社
ふくしまみらいシルクの会	西川産業株式会社
結城紬風土31研究会	株式会社小倉商店
川俣絹工房	福島寝装株式会社
白鷹瑞龍の会	株式会社布四季庵ヨネオリ
信州オリジナル絹の会	株式会社丸万中尾
日本のお蚕さん発展協議会	田中種株式会社
純日本の絹文化協会「松岡姫」グループ	株式会社伊と幸

協賛団体の紹介

日本絹文化振興会	株式会社丸上
日本の絹を守る会	株式会社西陣まいづる
甲斐絹グループ	株式会社甲斐絹座
秩父シルクの会	有限会社ハック
蚕彩会	装いの道株式会社
越後絹の会	株式会社猪井
きわみ絹の会	第一衣料株式会社
愛媛県蚕種の会	愛媛蚕種株式会社
日本蚕糸絹業開発協同組合国産シルク研究会熊本部会	日本蚕糸絹業開発協同組合
上田蚕種の会	上田蚕種株式会社
高原社蚕種の会	株式会社高原社
冨田蚕種製造所蚕種の会	冨田蚕種製造所
関根商店シルク工房の会	有限会社関根商店
HIKOTAROU☆入金真綿工房の会	石川彦太郎商店
野田定吉商店シルク工房の会	野田定吉商店
近江真綿振興会グループ協議会	代表　北川茂次郎
宮坂製糸シルク工房の会	株式会社宮坂製糸所
千葉県ブランド繭推進協議会	株式会社宮坂製糸所
松澤製糸紬工房の会	松澤製糸所
純国産シルクを守る会	碓氷製糸農業協同組合
アルチザン	株式会社マルシバ
純国産絹糸を守る会	勝山織物株式会社
純国産絹振興会“きぬなり”	織匠万勝
Silk So Good	富士新幸株式会社
埼玉シルクの会	有限会社コバヤシ
松澤製糸所純国産シルクの会	松澤製糸所
奄美島絹振興研究会	奄美島絹推進協議会

連絡先

〒103－0013　東京都中央区日本橋人形町３－５－４　M・S－２ビル　６F

蚕糸・絹業提携グループ全国連絡協議会事務局

メール　sanshi@kyogikai.com

担当　大石　明

特集“わがまちのシルクＰＲ隊”①

シルクのまちづくり市区町村協議会では、会員自治体内で、シルクのまちづくりに関するＰＲを行っている団体を“わがまちのシルクＰＲ隊”としてご紹介しています。現在、山形県鶴岡市「鶴岡シルクガールズ」、京都府京丹後市「丹後小町踊り子隊」、鹿児島県鹿児島市「本場大島紬クイーン」の３団体を協議会ホームページで紹介していますが、今回は、「鶴岡シルクガールズ」と「丹後小町踊り子隊」についてご紹介をいたします。

シルクガールズプロジェクト（山形県鶴岡市）

○活動への思い

鶴岡中央高校の総合学科家政科学系列被服系では、ひとりひとりが地域の伝統文化、伝統産業である絹について理解を深めたうえで、その素晴らしさを地域内外の方々に向けて広く発信しています。

これらの活動をとおして、人と人、時間、文化を繋ぐことを活動のテーマとして、鶴岡シルクを題材に４年前からプロジェクトに取り組んできました。

○平成２５年度の取り組み

鶴岡市のシルクタウンプロジェクトの一環として、これまで蚕の飼育体験に参加していた「繭人」の方々にもモデルとして参加していただき、シルクドレスを身につけてもらい、シルク素材の良さを体感していただく、モデル体験をしていただくというコラボ企画も盛り込んだ内容にしました。

○コレクションの実施

(1)　かたぐるま＆シルクガールズコレクション in かたぐるま祭

（平成 25 年 10 月 5 日）

鶴岡市ゆうあいプラザ「かたぐるま」の方々10 名にもモデルをつとめていただき、シルクガールズとのコラボファッションショーを実施しました。障がいのある方々からの「おしゃれをして特別な席に出る機会が少ないので、とびきりのおしゃれをしてみたい。」「ファッションモデルとしてランウェイを歩いてみたい。」という希望を叶えました。

(2)　シルクガールズ・コレクション 2013　in　出羽庄内国際村

（平成 25 年 10 月 27 日）

第 1 部は福祉施設のモデルさん 21 名と社会福祉系列・保育系の生徒、シルクガールズとのコラボショーで「出て・見て楽しむ」、第 2 部はシルクガールズによるドレスの変化を楽しむ「見て楽しむ」ショーの構成にしたコレクションを開催しました。

(3)　ふれあい＆シルクガールズコラボコレクション

（平成 26 年 2 月 2 日）

10 月のコレクションで、モデルとして協力していただいたデイサービスセンターふれあいの職員さんからの依頼で、コレクション当日会場に足を運ぶことが出来なった利用者さんや、職員の方々などにもファッションショーをみせてあげてほしいということで、シルクガールズが施設に出向いて、3 名のモデルさんとともにショーを実施しました。

○作品の展示

広く多くの方々にシルクファッションやプロジェクトについて知っていただくためドレスやパネルを大産業まつりや郷土資料館にて展示紹介を行いました。

大産業まつりでの展示

郷土資料館への展示

○今後の活動予定

これまで先輩たちから引き継いだ活動をするとともに、年齢や障がいの有無など関係なく、すべての人が参加しやすく、だれでもファッションを楽しむことが出来るようユニバーサルデザインへの理解を深めること、地域との交流を通して現状を把握し、問題点をあげたうえで具体的なファッションの提案をしていきたいと考えております。

■名称：鶴岡シルクガールズ（ツルオカシルクガールズ）

■人数：３０名

■紹介：平成２２年度に鶴岡中央高校総合学科家政科学系列被服系の生徒を中心として発足。鶴岡の近代化の礎を築いた絹産業について自らが地域の歴史、文化、産業を学び、地域の良さを広く多くの方々に伝えたいという想いで活動に取り組んでいる。

鶴岡シルクを素材としたドレスを製作するとともに、自らがモデルとなってコレクションを開催している。平成２５年度は蚕飼育体験を行った児童・福祉施設などと連携し、コレクションを開催するなどして鶴岡シルクの魅力発信を行っている。

■問い合わせ先：山形県立鶴岡中央高校

TEL：0235-25-5724　　FAX：0235-25-5733

特集“わがまちのシルクＰＲ隊”②

丹後小町踊り子隊（京都府京丹後市）

丹後小町踊り子隊　顧　問　岩崎　裕美さん
（ＮＰＯ法人京小町踊り子隊プロジェクト　代表理事）
丹後小町踊り子隊　代　表　藤井　美枝子さん
丹後小町踊り子隊　事務局　竹中　沙織さん

── 丹後小町踊り子隊の設立の経緯について教えてください。

岩崎　今から、10 年前、京都市内で、京小町踊り子隊を設立しました。丹後との出会いは、ちょうどその頃、地域のお祭りによんでいただいて、ステージで踊ったことです。着物の古着を衣装として踊っていたところ、見に来てくれた方に、私達が織った着物を大切に着てくれてありがとうと言っていただきました。

藤井　丹後ちりめんでまちづくりを、女性の力で、と考えていたところに、平成 24 年度、岩崎さんから、丹後で踊り子隊を作ってみてはというお話をいただき、メンバーを募集し、丹後小町踊り子隊を立ち上げました。デビューは平成 25 年 4 月です。

竹中　私は事務局担当ですが、踊り子隊のメンバーでもあります。着物が大好きで踊り子隊に入りました。着物を着たときの、非日常感、特別感が好きです。

── 設立から１年経過した丹後小町踊り子隊

岩崎　デビュー時から比べると、レベルアップしています。でも、踊れるようになってくると、それぞれ頭打ちになるときがくる。それぞれがその壁を乗り越えて、客観視して考えられるかどうか。お互い指摘しあえるかどうかが重要。最近は、練習リーダーを順番に決めて、お互い気が付いたことを言い合っている。

　若い人を動かすには哲学を入れることが大事。問題がおきたらすぐに解決すること。フォローは欠かせません。会社でも家庭でもない、踊り子隊だからできること、人としての学びの場であることが大切だと考えています。

竹中　丹後小町踊り子隊に入っているからこそ出会えた方々、経験できたことがたくさんあり、楽しく活動させていただいています。街でも声をかけていただけるようになりました。

── 丹後小町踊り子隊の２６年度

岩崎　１年目はよいけれど、２年目になると、同じ場所で同じ内容のステージはできない。演目を増やし、レベルアップをすることが必要。今年は扇子 20 本を使用した複雑な演目を指導していきたい。

竹中　最初の年は踊ることに一生懸命でしたが、２年目、同じイベントに立つときには、成長した丹後小町踊り子隊をみてもらえるように、メンバー全員、練習を頑張っています。

藤井　メンバーも頑張ろうという気持ちで練習できているし、京小町踊り子隊と一緒に進んでいきたい。

── シルクのまちづくりについて

岩崎　シルクに直接関わっていない人がメッセージをすることが大切だと思っています。着物業界だけでは同じ発想の繰り返しでよくないと考えています。よそ者の視点で考え方のフレームを変え、町の人は、よそ者によって町の素晴らしさを知り、エネルギーに変えていく。よそ者が入ってこそ、町はオープンになると思います。

藤井　町に風がふくことが大切。外に向かって軽やかに、シルクファンを増やすこと。いろんな世代をまきこみ、若い人たちが元気に活動しているのを見ると楽しいです。

竹中　踊りを磨くことだけでなく、丹後小町踊り子隊の目的である、丹後ちりめんのＰＲと地域活性化に貢献できるよう、発信もしていきたいですし、かつ、地元の方に愛される団体でありたいと願っています。

左から１人目：岩崎 裕美さん、左から５人目：竹中 沙織さん、右から１人目：藤井 美枝子さん
中央：京丹後市　中山 泰 市長

【特集】わがまちのシルクＰＲ隊②

■名称：丹後小町踊り子隊（タンゴコマチオドリコタイ）

■人数：１１名

■紹介：平成２４年１１月、丹後ちりめんの PR と、踊りを通じて地域を元気にしようと結成されました。大好きな着物を着て、躍動感のある舞を踊ります。

■問い合わせ先：丹後小町踊り子隊事務局

（京丹後市商工会内）

TEL：0772-62-0342　　FAX：0772-62-3553

E-mail：kyotango - sci@kyoto - fsci.or.jp

Facebook アドレス：https://www.facebook.com/tango.komachi.odorikotai

結城紬　紬のふるさと体験授業

市内中学生が結城紬の着心地を体験

茨城県結城市では，和装教育の一環として市内の全中学校（２年生）を対象として「紬のふるさと体験授業」を実施しました。

これはユネスコ無形文化遺産に登録された結城紬について，その歴史や伝統を学び，実際に結城紬を着ることで，結城紬の素晴らしさを子どもたちに認識してもらうことを目的に行われたものです。

家庭科で行われた体験授業では，市観光協会のきものイベント等に着付けスタッフとして協力している「着付けボランティア」が講師となって進められ，参加した中学生達は，結城紬の着心地，肌触り及び機能性について体感し，「はじめて結城紬のきものを着たけど，とても良かった。」という感想が多く聞かれました。

中学生のほとんどが，きものに袖を通すのははじめてでしたが，郷土の伝統文化に触れた今回の授業が，将来の結城市を築こうとする意欲の向上に繋がることを願っております。

（上）全員で着付けを行う前に，モデルとなる女子が，見本となり，着付けボランティアの説明を受けながら着付けが行われました。
（中）男子も同様にモデルが着付けを行いました。
（下）着付けが終わった後，全員で記念撮影

（左）写真のように並んだ結城紬のきものの中から，それぞれ好みの物を選んで着ました。
（右）生徒同士がお互いに手伝いながら，着付けを行いました。

（左）紬のふるさと体験授業の中で，結城紬の着心地体験とともに行われた糸取り体験の様子です。糸は結城紬の材料となります。
（右）学校の文化祭の中で行われた結城紬ファッションショーの様子です。

栃木県小山市　〒323-8686　小山市中央町１－１－１
http://www.city.oyama.tochigi.jp/

本場結城紬 ユネスコ無形文化遺産登録３周年記念事業
「いいことといろいろ(11月16日)小山きものの日」開催

結城紬が平成２２年１１月１６日にユネスコ無形文化遺産に登録されてから、昨年の１１月１６日に３周年を迎えたことを記念して、本場結城紬の産地、栃木県小山市では、ユネスコ登録日の１１月１６日を「小山きものの日」として、「きもの」を着るといい(１１)こと、いろ(１６)いろな催しを行いました。

当日、思い思いのきものを着て市内外から来場された方々は、当初の予想を上回る２５０名にものぼり、洋服で来場された方を併せると約５００名の方が、はじめての「小山きものの日」を堪能されました。

午前９時半から１２時まで、小山市立文化センター小ホールで行われた記念事業と、その後、きもので「おもてなしの店」を回り市内散策を楽しんだ様子をご紹介します。

記念事業実行委員長(小山市長)式辞

受付の様子

きもので来場された方々

記念式典

記念式典ではユネスコ無形文化遺産「本場結城紬」の産地である小山市において、日本文化の象徴とも言える「きもの文化」を見直し、「きもののまち小山」を目指して積極的にきものを着て行こうと、「きもの界」「経済界」「市職員」の代表者が、それぞれ「決意表明」を行いました。

決意表明

オープニング
琴・尺八演奏

着物スタイリスト
衣裳らくや店主
石田節子先生
トークショー

きものミニファッションショー

小山きものの日応援団

小山きものの日開催にあたり、小山きものの日応援団として、着付けボランティア「着付け隊」と、きものを着たお客様にサービスをしてくださる「おもてなしの店」を募集したところ、着付け隊には４２名（一般２５名・市職員１７名）、おもてなしの店には呉服店・飲食店を中心に４３店舗の応募があり、「小山きものの日」を盛り上げてくれました。参加者には、おもてなしの店を回ってシールを集めると豪華賞品が当たるプレゼントに応募できる特典もありました。

着付け隊による無料着付けサービス

おもてなしの店でサービスを受ける方々

小山きものの日を通じて、改めてたくさんの方にきものの魅力を発見していただけたと思います。「きもの」を身近により多くの方に気軽に着ていただけるように、また、今後のシルク関連の様々な産業の発展を願い、今後も世界の「宝」である本場結城紬の振興策に取り組んでいきたいと思います。

【問い合わせ先】小山市工業振興課結城紬振興担当　TEL:0285-22-9397

❒会員自治体の情報「長野県岡谷市」

OKAYA BRAND　岡谷 — OKAYA —　LOGO　MARK

平成 26 年８月１日
岡谷蚕糸博物館が、生まれ変わります！

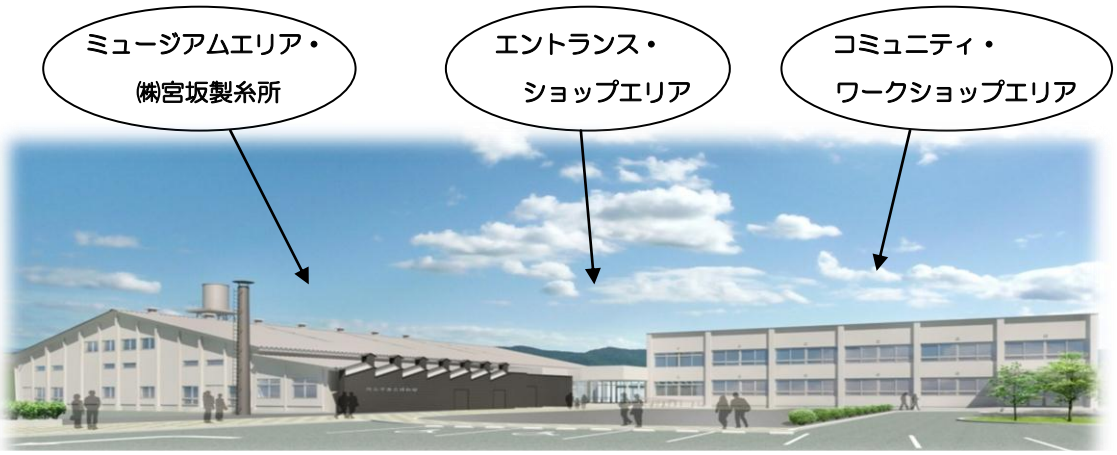
岡谷は明治初年よりわが国の生糸の一大生産地として発展し、わが国の近代化に大きく寄与し、外国から「シルク岡谷」と呼ばれてきました。明治初期からの製糸機械類を時代的背景に基づき展示するわが国唯一の博物館として、昭和 39 年に開館した岡谷蚕糸博物館は、新博物館の建設に向け移転準備を進めています。

開館は平成 26 年８月１日を予定しています。

新岡谷蚕糸博物館は、エントランスエリア、コミュニティ・ワークショップエリア、ミュージアムエリアから構成されます。

「エントランスエリア」は、市内の近代化産業遺産群（平成 19 年経済産業省認定）を巡る出発点として、「岡谷ブランド」の情報発信拠点となります。「コミュニティ・ワークショップエリア」は、養蚕・機織り・カイコ学習・まゆアート・研修などを行う多目的スペースとなります。「ミュージアムエリア」は、製糸業の全容を一堂にご覧いただける糸都岡谷ものがたりゾーン、㈱宮坂製糸所（上州式座繰り機・諏訪式座繰機等）の動態展示ゾーンからなります。

製糸工場が併設する世界に類のない蚕糸博物館です。
展示・見学はもとより、体験･学習活動も充実します。
皆様のお越しを心よりお待ちしております。



新岡谷蚕糸博物館の外観イメージ
(旧(独)農業生物資源研究所跡地　長野県岡谷市郷田 1-4-8)

問合せ先：〒394-8510 長野県岡谷市幸町 8-1　岡谷市役所　ブランド推進室
TEL 0266-23-4811（内線 1491）　E-mail　brand@city.okaya.lg.jp

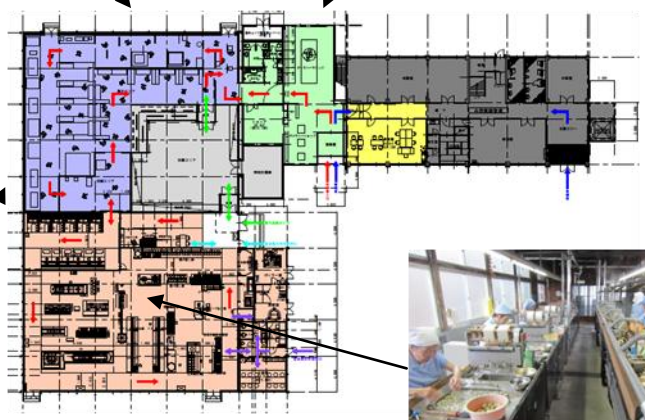
OKAYA BRAND　岡谷 —OKAYA—　LOGO　MARK

新岡谷蚕糸博物館（仮称）の展示イメージ

シルクとの出会い

エントランスエリア

糸都岡谷の記憶

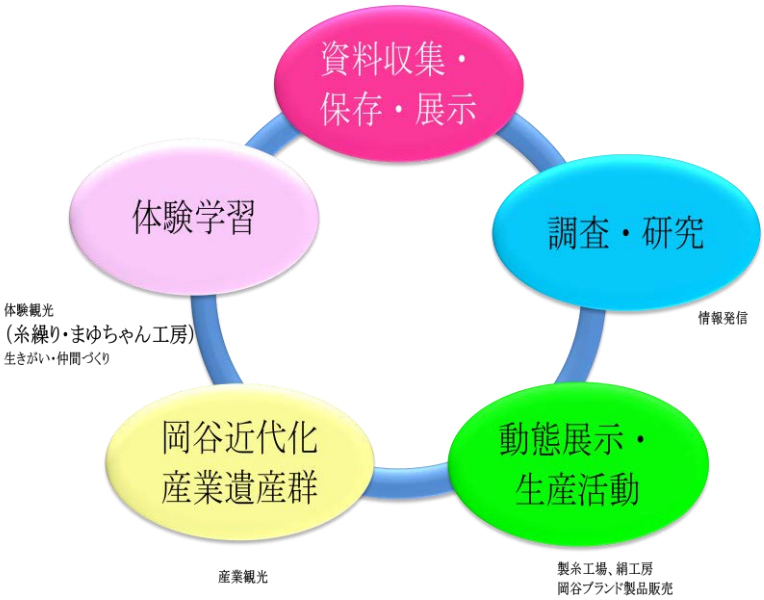


コミュニティ・
ワークショップエリア

糸都岡谷モノがたり

動態展示　(株)宮坂製糸所

新岡谷蚕糸博物館（仮称）の活動



カイコ学習

近代化産業遺産

滋賀の恵みが育んだ

浜ちりめん

浜つむぎ

西にびわ湖、東に霊峰伊吹山を仰ぐ湖北の自然は、美しい景観とともに絹織物に最適な環境を造っています。伊吹山の貯えた冷たい地下水と、湿潤な気候が強い撚糸「水撚り」を可能にし、びわ湖の豊富な軟水を使用した精練は、ちりめんをしなやかに仕上げます。

この地に連綿と受け継がれ「**絹白生地の最高級品**」といわれるに至った「**浜ちりめん**」は、滋賀の自然の恵みと、それを理解し、大切に守り伝えてきた先人たちの英知が育んだ「美」の結晶です。

染め付きがよく。繊細な図柄を鮮やかに染め分け、奥行きのある色に美しく染め上がります。

精練

世界屈指の軟水であるびわ湖の深層水を使用し、最高の絹精練を行っています。この工程において不要になったセリシンや汚れなどの不純物を除去します。びわ湖の豊富な軟水は、浜ちりめんをしなやかに仕上げます。

水撚り

浜ちりめん特有のシボとよばれる表面の凹凸は、緯糸に撚りをかけ（撚糸）織り込んだのち、精練の時に糸が元の状態に戻ろうとする力で生まれます。その撚りの強さは、1メートル間で三千回程度撚っています。撚糸は強ければ強いほどシボが鮮やかに現れ、風合いも増しますが、原糸の生糸は乾いた状態では切れ易いため、水で湿らせながら撚糸します。この手法を水撚りといい、この時使われるのが、伊吹山の雪解けによる伏流水です。

織り

浜ちりめんは無地であるがゆえに小さな織疵でもごまかしのきかない非常に繊細な織物です。熟練の織手によって細心の注意を払いながら織上げられます。

一越ちりめん、古代ちりめん、変わり無地ちりめんなど高級和装用として使用されます。

浜縮緬工業協同組合

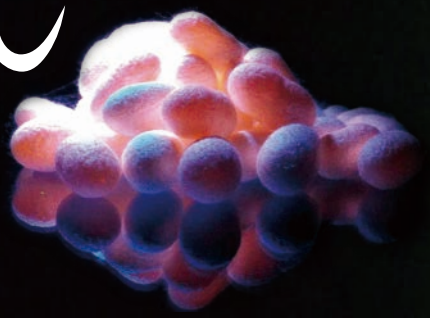
ホームページ
http://www.hamachirimen.jp/

滋賀県長浜市祇園町 871

TEL　0749-62-4011
FAX　0749-65-2695

光る浜ちりめん

着物地の最高級品“浜ちりめん”の伝統技術と
最新バイオテクノロジーのコラボレーション



ドレスデザイン・制作：
田中秀彦・大野知英（成安造形大学）
パフォーマンス：古田敦子

浜縮緬工業協同組合は、
独立行政法人農業生物資源研究所が開発した
遺伝子組み換えカイコが作る緑色、赤色、オレンジ色などの
蛍光色を発する生糸などを用い光る浜ちりめん製品を開発しました。

蛍光絹糸は高い温度をかけると光るもとになる蛍光タンパク質が壊され、光らなくなるという大きな弱点があります。逆に縮緬は特有の「シボ」を作るため緯（よこ）糸製造工程や精練（せいれん）工程で高温処理を行う必要があります。この二つの相反することを克服するために、浜ちりめんでは、300年以上の永い伝統に培われた高い技術力と農業生物資源研究所および滋賀県東北部工業技術センターの技術協力により、糸づくり時の工夫や精練手法を新たに開発するなどして、光る浜ちりめんが誕生しました。

■ 浜ちりめん製品についてのお問い合わせ
浜縮緬工業協同組合
〒526-0061 滋賀県長浜市祇園町871番地
TEL 0749-62-4011　FAX 0749-65-2695　E-mail　info@hamachirimen.jp

■ 蛍光絹糸についてのお問い合わせ
独立行政法人農業生物資源研究所 広報室　TEL 029-838-8469

※この生地に使用した蛍光タンパク質は、Amalgaam/MBLおよび理化学研究所により開発されました。

丹後ちりめんの里 よさの

2013 ちりめん街道まるごとミュージアム

１０月１３日、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されているちりめん街道一帯を舞台に、「ちりめん街道まるごとミュージアム」が開催されました。

街道沿いには、ちりめん小物や特産品を展示・販売する「街道市」、きもの着付コーナー、きものパレードが行われました。

パレード風　景

また、街道内の民家を利用した「丹後ちりめんきものショー」では煌びやかな女性きものを披露し、多くの人が華やかなショーに見入るなど、イベントが盛り上がりました。

街道内でも艶やかな振り袖や上品な訪問着姿がたくさん見られ、イベントに華を添えていました。

ショー風　景

❐会員自治体の情報「鹿児島県鹿児島市」

本場大島紬「産地まつり」

本場大島紬織物協同組合では、本場大島紬の魅力を地元の皆様に改めて感じていただくため、今年度「本場大島紬“産地まつり”」を開催しました。

本場大島紬は、1300 年の歴史と伝統を誇る鹿児島県を代表する織物です。一反の大島紬は 30 を超える工程と幾人もの職人の手を通して作られます。大島紬には、軽い・しわになりにくい・着崩れしない、などの特徴がありますが、地元でもその魅力を再認識していただくため、経済産業省の伝統的工芸品月間に合わせて開催を行いました。

産地まつりでは、伝統的な泥大島や泥藍大島、おしゃれな色大島や白大島などバリエーション豊かな種類毎に大島紬を展示した「本場大島紬新作展」や、来場者の投票による「平成 25 年度本場大島紬新作コンテスト」を実施しました。

また、会期中「クィーンコンテスト最終選考会」や、参加者全員が大島紬で参加する「きものパーティ」も同時開催し、染色織物で日本最古の伝統ある大島紬の魅力を、市内外の多くの方々に発信することができました。

【お問い合わせ】

本場大島紬織物協同組合

〒891-0123　鹿児島県鹿児島市卸本町４－７

☎：099-204-7550

【関連写真】

❐会員自治体の情報「鹿児島県奄美市」

奄美群島日本復帰６０周年記念「本場奄美大島紬大産地まつり」

平成２５年に奄美群島が日本に復帰して６０周年を迎え、これを記念して、平成２５年１０月１２日・１３日の二日間の日程で、「本場奄美大島紬大産地まつり」を開催しました。

本場奄美大島紬業界は、和装需要全体の低落に伴う生産反数の減少、従事者の高齢化といった構造的な問題を抱え、全体の地盤沈下に歯止めがかからない状況にありますが、現在の厳しい状況を産地が自ら抱える在庫を財産として積極的に活用し、産地主導の生産・流通体制へと足場を固める好機として、産地一体となって、本場奄美大島紬の販売と紬文化の PR に努めました。

販売コーナーでは、あまりまとまって見る機会のない反物を集め、展示・販売を行うとともに反物以外にもネクタイやカバン、ストールなど紬の小物や泥染め製品など様々な種類の製品の販売も行いました。

また、摺り込みと呼ばれる「加工」や「織り」などの実演を行ったほか、T シャツやバッグなどを実際に泥を使って染める泥染め体験や機織り体験、紬の着付け体験など、紬の製造工程の一部を見学・体験できるコーナーを設置しました。

普段なかなか目にする機会のない作業風景を実際に見学・体験できるとして、来場者も熱心に質問したり体験するなど大変好評でした。

この他にも呈茶コーナーやスタンプラリー、お楽しみ抽選会、紬ファッションショーや奄美に縁のあるアーティストを招いてのミニライブなど一日を通して楽しめるイベント実施し、来場者からは、「紬製品を身近に感じることができて良かった」「紬を勉強できた」「このような機会をもっと増やしてほしい」などの声もあり、多くの方が紬に親しむことができた二日間となりました。

【お問合わせ先】奄美市紬観光課　TEL：０９９７－５２－１１１１

シルクのまちづくり市区町村協議会・構成団体等一覧

（平成 26 年 3 月 31 日現在）

■会員（２６団体）

1	山形県鶴岡市	10	新潟県十日町市	19	京都府京都市
2	山形県長井市	11	新潟県小千谷市	20	京都府宮津市
3	山形県白鷹町	12	新潟県南魚沼市	21	京都府京丹後市
4	福島県川俣町	13	石川県金沢市	22	京都府与謝野町
5	茨城県結城市	14	山梨県富士吉田市	23	愛媛県西予市
6	栃木県足利市	15	山梨県西桂町	24	鹿児島県鹿児島市
7	栃木県小山市	16	長野県岡谷市	25	鹿児島県奄美市
8	群馬県富岡市	17	長野県駒ヶ根市	26	鹿児島県龍郷町
9	東京都新宿区	18	滋賀県長浜市		

◇役員

会　長　京都府京丹後市（市長　中山　泰）

副会長　山形県鶴岡市・福島県川俣町・群馬県富岡市・石川県金沢市・長野県岡谷市・京都府与謝野町・愛媛県西予市

監　事　山梨県西桂町・京都府宮津市

■特別会員［オブザーバー］（５名）

農林水産省生産局農産部地域作物課長
経済産業省製造産業局繊維課長
経済産業省商務情報政策局伝統的工芸品産業室長
経済産業省商務情報政策局生活文化創造産業課長
経済産業省中小企業庁経営支援部新事業促進課長

■顧問（１１名）

◎ファッションジャーナリスト

清水　早苗氏　　ジャーナリスト／クリエイティブ・ディレクター

◎クリエーションコーディネーター

松田　正夫氏　　（独）中小企業基盤整備機構近畿支部近畿支援事務局プロジェクトマネージャー

岡田　茂樹氏　　日本ファッションプロダクト協会　代表理事

◎テキスタイルデザイナー

須藤　玲子氏　　株式会社布取締役

酒井　美和子氏　　（有）GBカンパニー代表取締役

福井　健二氏　　K.FUKUI PERSONAL OFFICE&EA 主宰

永森　達昌氏　　オフィス・ナガモリ代表

◎和装

早坂　伊織氏　　着物伝承家

笹島　寿美氏　　着装コーディネーター・帯研究家

◎研究機関

玉田　靖氏　　（独）農業生物資源研究所　遺伝子組換え研究センター新機能素材研究開発ユニット長（工学博士）

長島　孝行氏　　東京農業大学　農学部農学科　教授（農学博士）

■協賛団体（２５団体）

◎蚕糸団体

（財）大日本蚕糸会,（社）日本生糸問屋協会,中央蚕糸協会,碓氷製糸農業協同組合,蚕糸・絹業提携グループ全国連絡協議会

◎産地織物組合

鶴岡織物工業協同組合,福島県絹人繊織物構造改善工業組合,小千谷織物同業協同組合,山梨県絹人繊織物工業組合,滋賀県絹人繊織物工業組合,丹後織物工業組合,本場大島紬織物協同組合,本場奄美大島紬協同組合

◎絹業団体

全国染色協同組合連合会,全国染織連合会,京友禅協同組合連合会,京都工芸染匠協同組合,日本織物中央卸商業組合連合会,(社)全日本きもの振興会,（社）全日本きものコンサルタント協会,(財)シルクセンター国際貿易観光会館（シルク博物館）,東京ネクタイ協同組合,日本繊維輸入組合,新宿区染色協議会

◎その他団体

GS 世代研究会

シルクのまちづくり市区町村協議会の設立趣旨

古来よりわが国に伝わる尊い宝、絹。

絹を用いる産業、すなわちシルク産業は、地域経済の中で重要な役割を果たし、地域の生活や風土に根付いた産業として我々の地域とともに発展してきました。同時に、悠久の歴史の中でこれら産業が培った技術により生み出される製品は、地域文化を育むと同時に、わが国文化の根幹に大きく関わり、地域の価値や日本の品格を伝えるものとして、産業・文化の両面で貢献しています。

ところが、社会・生活環境が急激に変化する中で、現在では資源の枯渇化や人材の不足、市場の縮小による需要減少など、地域のシルク産業の発展に支障が生じているとともに、近代化・平準化の中でわが国固有の誇りある文化の風化が危惧されているところです。

一般的に、シルク製品は、養蚕、製糸、織物、染色など多段階の工程の中で、それぞれに長年にわたって極められた究極の技術が、完璧なまでに調和され完成されます。またそのものづくりは、技術者同士の厚い信頼と連携の上に成り立ち、日本が誇るものづくりの原点ともなっています。さらに、世界においてもシルクは、かつてシルクロードという長大な交易ルートを創造し、産業を活性化するとともに東西文化の交流を育んできています。すなわちシルクは、単なる繊維素材ではなく、歴史的にも経済社会の様々な断面を相互に発展に導く共通のきずなであり、今後においてもシルクを通じた「連携」「国際展開」「産業活性化」「文化交流」などによって、様々な分野の未来に多くの示唆と可能性を与えてくれるものであると確信します。

こうしたシルクの持つ意味を改めて認識し、シルクに関連する産業、またはシルクに関係する歴史・文化を持つ市区町村が連携し、「シルク産業の活性化」や「シルク文化を活用した魅力ある地域づくり」など、シルクの意味を活用して新たな展望を切り開くため、「シルクのまちづくり市区町村協議会」を設立します。

平成２２年１月２６日

編集／発行　　**シルクのまちづくり市区町村協議会**

発 行 年 月　　**平成２６年３月**

【この情報誌に関するお問い合わせ先】

シルクのまちづくり市区町村協議会事務局

（京丹後市商工観光部商工振興課）

〒629-3101　京都府京丹後市網野町網野 353 番地の 1

TEL：0772-69-0440／FAX：0772-72-2030

メール：info@silkroad-japan.org

ホームページ：http://www.city.kyotango.lg.jp/silk/

ブログ：http://silk25.blog.fc2.com/